

経済危機の構図

(9)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

公害の原点・足尾鉍毒事件に殉じた田中正造

足尾銅山の鉍毒被害は、明治時代後半に発生した日本の公害の原点である。現地は今なお荒廃している。田中正造は当時の民衆政治家で、今流に言えば環境保護運動家として、足尾銅山の鉍毒で被害を受けた村人と共に国を相手に闘い続け、その解決のために全生涯を捧げた。

■民衆政治家で公害の闘士

田中正造は一八四一（天保二二）年、栃木県小中村に生まれた。二八歳で主家の六角家改革事件で一カ月入獄する。三〇歳で県の役人となり、三一歳のときに上役暗殺の嫌疑で二年九カ月の獄中生活を送るが、政治経済の読書に励んだ。疑いがはれて村に帰り、商売と勉学に打ち込み、やがて政治に身を捧げることを決意した。

一八七八（明治一一）年、三八歳で栃木県の区会議員となり、明治一三年に栃木県会議員に当選し、国会設置運動に奔走した。当時、栃木新聞に自由民権論を掲載した。一八九〇（明治二三）年の第一回衆議院選挙で当選し、代議士となった。以後七回当選し、国会では二〇回以上にわたって「足尾鉍毒問題」を取り上げた。

明治初期に日本最大の鉍山にあり、江戸時代から銅を産出し

■明治初期に日本最大の鉍山に

足尾銅山は今の日光市足尾地区にあり、江戸時代から銅を産出し

ていた。明治維新のあと新政府に没収されて、県営から小野組の経営に移るが、小野組が瓦解して別家の古川市兵衛が経営に乗り出した。

一八八一（明治一四）年、鷹之巢直利（鉍脈）を始め、次々と大鉍脈が発見されて経営が好転した。採鉍の近代化と近代鉍山技術の導入で、日本最大の鉍山となった。銅は当時の日本の主要な輸出品であった。年産出力は数千トンとなり、東アジア第一位の銅産地となった。

■鉍毒被害が洪水で拡大

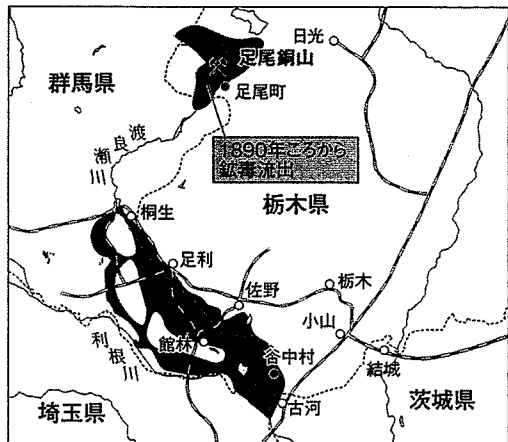
足尾銅山の発展に伴って精錬時の鉍毒ガスや、それに伴う酸性雨と排水に含まれる鉍毒によって地域一帯に大きな被害をもたらした。一八九〇（明治二三）年の渡良瀬川の大洪水で、栃木・群馬の

両県に鉍毒被害が発生し、作物の不毛状態が拡大した。一八九六（明治二九）年七月から九月にかけて、渡良瀬川が三度も大洪水となり、一府五県に鉍毒被害が及んだ。一八九八（明治三一）年九月、再び渡良瀬川が大洪水となり被害が拡大した。山林の乱伐と鉍毒ガスで、一帯はハゲ山となって崩れ落ち、鉍毒水の流出は激しさを増していった。度重なる大洪水で広い地域が汚染し、住民も大きな被害を受け数千人の死者がでた。

■請願民を警察が襲う

一八九七（明治三〇）年二月、被害民は大挙して上京し、鉍毒被

足尾銅山鉍毒の被害地域



出典：『日本史』（学習研修社）

害救済と鉱業停止を政府に請願する、いわゆる「押出し」を決定した。三月に第二回の大挙押出しを決定し、農商務大臣の榎本武揚は被害地を視察した。

一九〇〇（明治三三）年二月、四回目の押出しのために上京した群衆は、利根川畔で警官隊と衝突した。警官が襲いかかり一〇〇人あまりが逮捕される事件が起きた。世に言う川俣事件である。

■国会質問「民を殺し国家を殺す」
田中正造は国会質問を繰り返して、政府に対策を迫った。その数は二〇回以上に及んでいる。特に川俣事件が起きた明治三三年二月の国会で「亡国演説」をぶった。「院議を無視し、被害民を毒殺する儀につき質問書」と題して政府の無策を糾弾した。その一節を紹介したい。

質問の標題は「亡国に至るを知らざれば之れ即ち亡国の儀に付質問」とし、冒頭に「民を殺すは国家を殺すなり」と厳しく追及した。「法を蔑にするは、国家を蔑にするなり。皆自ら国を蔑にするなり。皆国を毀なり」「財用を濫り民を殺し法を乱して而して亡びざる国なし。之を奈何。右質問に及候也」国民を殺すことは、国を殺すこ

とだ。法を蔑にすることは、国を蔑にすることだ。皆国を毀くことなのだ。「国の財を濫用して法を乱せば亡びない国はない。さあどうだ」という要旨である。

■官と薩長政治を批判

質問は次のように具体的に鉱害の経過を述べている。

・鉱害の流れが始まったのは明治一二年、足尾銅山に製銅の機械を据えたのが同一二年。一三年から毒が流れたのを栃木県知事が見つけて、やかましく言うとな、藤川為親知事がたちまち島根県に放逐され、これが政府の干渉した手始めとなる。

・藤川（知事）が放り出されると、その後の知事は「最早鉱毒ということは願書に書いてはならない、官吏は口にしてはならない、鉱毒ということは言ってはならない」ということになってしまった。

・これがために、無心な人民は一〇年もの間、鉱毒を知らずにいたが、不毛の地ができたことについて非常に驚いて騒ぎ始めた。これは明治二三年からのことだ。・関東の中央に能登国の二倍ほどの鉱毒地。この点について諸君に訴えたい悲しいことがあ

る。関東のど真中へ大きな砂漠地をこしらえたのは、古川市兵衛である。この仕事を大きくさせたのは薩長土肥だ。

■訴願人を殺す暴挙

「殺されないようにしてくれ」という訴願人を、政府が撃ち殺すという暴挙に出た。兵器を持っていない人民に、サーベルを持って切っけかき、逃げる者を追うというに至っては如何。之を亡国でない、日本は天下泰平だと思っ

いるのか。

三百人の警察官がサーベルを揃えて、槍の如くに呐喊した。殴る時には土百姓土百姓と掛声。被害民の方は棒もステッキも持っていない。世話人が指揮して、品行を方正にし静肅にせよと申し渡しまでしたくらいだ。これに対して勝ちどきをあげるとはなんだ。陛下の臣民を警察官が殺すと言うことは、陛下の御身に傷つけ奉ること、これは、己の身体に傷つけ

足尾鉱害年表

年代	内容
1868 (明治 1)	足尾銅山を明治政府が接収し民営化
1869 (明治 2)	古川市兵衛 (小野家別家) が鉱山業に進出
1877 (明治 10)	古川市兵衛、足尾銅山・精錬所を操業
1890 (明治 23)	渡良瀬川大洪水、栃木・群馬県に鉱害被害発生
1896 (明治 29)	渡良瀬川三たび大洪水。1府5県に鉱毒被害
1897 (明治 30)	鉱毒被害民が2回にわたり大挙押出し
1898 (明治 31)	渡良瀬川大洪水。第3回大挙押出し
1900 (明治 33)	第4回大挙押出し、川俣事件が発生
1901 (明治 34)	田中正造、国会で「亡国質問」、政府を追及 田中正造、衆議院議員を辞職 明治天皇に直訴状提出に迫るが果たさず
1904 (明治 37)	日露戦争が始まる
1907 (明治 40)	足尾銅山暴動事件が起こり軍隊出動 谷中村残留民に強制退去命令
1913 (大正 2)	2月、田中正造、河川調査の帰途に倒れる 4月、谷中村にて死去
1917 (大正 6)	谷中村の最後の居住 16 戸が移住。墓前決別式
1940 (昭和 15)	戦時体制強化で朝鮮人労働者を坑内労働に使用
1941 (昭和 16)	太平洋戦争が始まる
1947 (昭和 22)	キャサリン台風、渡瀬川決壊。栃木県で死者 325 人
1966 (昭和 41)	足尾銅山の月産銅量 55 トンで戦後最高を記録
1973 (昭和 48)	足尾銅山の採掘中止 (閉山)

ること。引っ張っていくのなら、この田中正造を一番に引っ張っていくがよろしい」

以上、質問書の要点を引用したが、体を張って被害民の苦難を救う叫びが伝わってくる。これに対する政府側の答弁はどうであったのか。「質問の旨趣その要領を得ず、依って答弁せず。右答弁に及び候なり」と、とぼけた調子であった。

■検事論告に憤慨し欠伸

一九〇〇（明治三三）年七月に、川俣事件で五一名が前橋地裁に起訴され、一二月地裁の判決で二九名が有罪となったが、双方とも控訴した。

一月の公判で検事の論告に憤慨した田中正造は、抗議の欠伸をした。これが官吏侮辱罪に問われるところとなる。欠伸事件は明治三五年六月に有罪が確定し、四一日間巢鴨監獄で服役した。獄中では専ら聖書を読んでいたという。

投獄によって彼の意思はますます強固となり、鉾害救済の運動の情熱は燃えていった。

■天皇に直訴果たさず

国会活動では限界があり、事態が解決されないと悟った田中は、一九〇一（明治三四）年に議員を辞職し天皇に直訴を決意した。一

二月一〇日、議会開院から帰途の明治天皇の馬車に直訴状を手に駆け寄ったが、さえぎられて果たせなかった。この直訴事件を機にして鉾毒問題が広く知れ渡り、東京の本郷中央堂で鉾毒救助演説会が開かれ、牧師や七〇〇人あまりの学生が現地調査に訪れるなど、社会問題化していった。

一九〇七（明治四〇）年には、現地で暴動事件が起きて軍隊が出勤して鎮圧した。

■被害地に住み、活動中に死去

政府は公害運動の拠点であった谷中村の廃村を決めた。一帯に巨大な遊水池を設置する計画を決めて強行し、村は強制廃村となった。

一九〇七（明治四〇）年に強制破壊が行われた。田中正造はこれに反対し、住民と一緒に谷中村に住み続け、過酷な試練と苦難を共にしながら治水調査を続行した。

一九一三（大正二）年八月二日、

河川調査から谷中村への帰途、病に倒れて庭田家に身を寄せたが、九月四日、ついに帰らぬ人となった。享年七三。葬儀には数万の人が集まった。

財産はすべて鉾毒反対運動に使い果たした。亡くなったときの財産は袋一つ。中身は日記、河川調

査の原稿、聖書と憲法、小石三個だけだったという。田中の遺志を継いだ元村人一六戸が、移民を拒否し、自宅跡に住み続けたが、一九一七（大正六）年二月、同村の田中正造の墓前の決別式で祈りを捧げたあと全員退去した。

■辛酸また佳境

遺骨は館林市の雲龍寺に手厚く葬られ、墓の右手には「救現堂」が建てられている。堂の名は彼が死ぬ前に残した「現在を救え」の言葉に由来するという。数度の投獄にも屈しなかった。「辛酸また佳境に入る」、自分のすべてを打ち込めば苦勞も喜びとなる。これが信条だった。

最大の被害地の毛里田地区には「祈念鉾毒根絶碑」が一九七七年に建てられた。記念碑ではなく祈念の碑である。未だ残っている鉾毒の根絶を願う祈りが込められている。

■昭和に続く鉾山悲劇

昭和に入り戦時色が強まる中、昭和十四年には足尾銅山鉾業報国会が結成され、一九四一（昭和十六）年に太平洋戦争が始まり、戦時体制が強化され採掘は一層拍車がかかった。国内労働力の不足を補完するため朝鮮人労働者を使用

し、厳しい坑内労働に従事させた。一九四四（昭和一九）年には強制連行された中国人が就労させられた。昭和二〇年の終戦と同時に、中国人、朝鮮人の争議が起こった。昭和二二年九月、キャサリン台風で渡瀬川と袋川が決壊し、足利市のほとんどが濁流に襲われ、死者・行方不明者は三一九人に達した。一九七三（昭和四八）年二月、足尾銅山は採掘を中止して閉山、ようやく一〇〇年の悲劇の幕が降ろされた。

■鉾毒事件は国家の犯罪

鉾毒事件は国家の犯罪であった。今も足尾鉾山跡の周辺の山々は、赤茶色の地肌が剥きだしになり荒廃している。その復旧に昭和二〇年から平成一九年までの六三年間に、緑化のために約一一〇億円が投じられ、国や栃木県が砂防ダムの建設、復旧、緑化など合わせて九五二億円が投じられたという。

しかし、なおも復旧困難な広大な土地が残されている。鉾害の闘いに身を投じた田中正造の精神は、今も光り輝き、多くのことを語りかけている。

◆参考文献：立松和平「毒——風聞・田中正造」、城山三郎「辛酸」